2010年12月20日発行

No.26

ニュースレター News Letter

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

坂田祐の生涯を辿って

坂田研究プロジェクト代表　帆苅　猛

関東学院の第3の源流である「中学関東学院」を宣教師のテンネーとともに1919年に創設した坂田祐は、青年時代より晩年に至までの長期にわたる日記を残している。その中には、関東学院の重要な歴史に関する記述も少なくない。学院史の研究に資するためにということで、この日記が2002年に坂田家より「キリスト教と文化研究所」に寄贈された。

これを契機に、坂田研究プロジェクトが組織され、坂田日記の解読・研究を中心に研究活動を展開している。ただ、坂田の日記は独特のくせ字で記されており、判読が非常に困難である。現在は、坂田祐のご子息坂田創氏に解読していただきながら研究を進めている。この解読作業の中で、従来の学院史の記録が訂正されたり、新たに判明したりしたものも少なくない。

この日記の解読・研究に合わせて、坂田祐の生涯や活動についての研究も進めている。これは坂田の教育観に深く関係しており、ひいては関東学院の建学の精神、校訓とも連なってくると思われるからである。現在までのところ、坂田の両親の出身地である会津と、坂田が故郷を出てから軍隊にはいるまでの期間を過ごした足尾に出かけて調査をした。それぞれに多くの収穫が得られた。

このほか、坂田におおきな影響を与えた内村鑑三との関わりについても研究を続けている。

Column「自己紹介と感想」

客員研究員　古谷圭一

今から約50年前、まだ大学院に在学中にそれまで無牧に近い状態をなんとか支えてきた教会を解散し、残った会員とともに事情を理解してくれていた教会に移籍した。それ以来、当時の方々の多くは天に召され、また、種々の都合でばらばらとなった。その歴史を書きとどめるのが後に残った自分の仕事と思い、退職後の2005年から四谷教会の歴史の調査とそのまとめに取り掛かった。幸い、若いときから歴史に興味をもち、専門の分析化学の領域での歴史的作業も行っていたので、本研究所の研究員として加えていただき、思いもかけずに豊富な資料と数多くの助言を与えられている。その中で毎年研究論文を発表でき、バプテストのより広い理解とすばらしい人のつながりを得ることが出来ていることを有難く感じている。ただ都内吉祥寺からの片道2時間をかけての研究会参加は、図書館での調査を含めて、さらにもっと多くの方々とのディスカッションができる場でありたいと願っている。

坂田研究プロジェクト　２０１０年度　特別研究

「会津での調査・研究」報告

坂田研究プロジェクト代表　帆苅　猛

「坂田研究プロジェクト」では、坂田家より寄贈された「坂田日記」の研究に合わせて、坂田祐の生涯を辿りつつ、その教育観を探ろうとしてきた。昨年度まではとくに、足尾時代の坂田の研究に焦点を当ててき、それなりの研究成果を挙げてきた。今年度からは会津を研究の中心的な場所として取り上げている。

会津は坂田祐の両親、中村富造とミエの出身地である。とくに、母ミエは会津藩の上級武士であり、白虎隊２番隊隊長であった日向内記の長女である。坂田にとっては、会津は両親及び祖父日向内記の出身地であるばかりでなく、自らが会津武士の精神によって育てられたことを強く自覚し、それを誇りにしていた。

ただ、坂田は戦後会津をたずね、白虎隊記念館を訪れたとき、祖父日向内記が若い隊士たちを残したまま行方不明になったとの説明を聞き、心外の思いで立ち去ったという。両親を通して幼少期より、祖父が会津武士として最後まで殿様を守る為に力を尽くしたと聞いてきた坂田にとっては、その祖父が部下を放置して行方不明なるなどということは考えられないことであった。坂田は「あの会津武士的教養に満ちた、私の母を生んだ私の祖父の人柄は、私どもが深く確信ができます。戸の口原における、その特別の事情については、是非とも詳細のご研究を願いたいのです」と言い残している（この点については『新編　恩寵の生涯』３－６頁、５６８-５７３頁を参照のこと）。

近年、この事情について新たな研究がなされた。それは冨田国衛氏による『会津戊辰戦争　戸の口原の戦い－日向内記と白虎隊の真相』（おもはん社、２００８年）である。冨田氏は上述の坂田の言葉を受けて、伝えられている「日向内記逃亡説」の真偽を確かめるべく調査を始めたという（本書「はしがき」）。内容の詳細についてはまた別の機会に紹介したいが、さまざまな資料にあたり、それらを比較しつつ、「日向内記逃亡説」を否定している。

今回の会津での調査研究の主要なテーマは、おもはん社を訪れて冨田氏から話を伺うこと、白虎隊記念館を訪問して館長の早川廣中氏と面談すること、及び、会津藩や日向内記に関わる地を訪問して資料を集めることであった。冨田氏と早川氏には矢嶋道文先生があらかじめ面会の約束を取りつけておいてくださった。

矢嶋先生、伊藤綾さん（文学部大学院生、記録を依頼）、牛坊千津枝さん（「キリスト教と文化研究所」スタッフ、写真撮影と録音、会計事務を依頼）と帆苅の４人（安田八十五先生も参加される予定であったが、急用のため取りやめ）で車で出発した。東北自動車道、磐越自動車道を経て喜多方に向かい「おもはん社」に冨田氏を訪ねた。いろいろと話を伺い、さらに日向内記や中村家に関係する資料をいただいた。

翌日は白虎隊記念館を訪問し、飯盛山を巡った後、昼食を取りながら早川氏と面談した。燦葉会栃木支部の本田梧郎も加わってくださった。早川氏によると、「日向内記が食料調達のために隊を離れた」といわれているのは事実ではない。もしそうだとすると、何人かの隊士を連れて行くはずだ、という。そうではなくて、佐川官兵衛と作戦上の打ち合わせをするためであっただろう、という。

早川氏からも白虎隊に関する資料をいくつかいただいた。そしてさらに、日向内記と坂田祐や関東学院に関する資料を置くスペースの場所を変え、少し広くすることを約束してくださった。

冨田氏も早川氏も、関東学院大学で講演をする機会を与えられたら、喜んで応じてくださるとのことであった。

このあと、戦場となった戸の口原をめぐり、さらに、昔の会津の宿場であった大内宿を経、白河に抜けて東北自動車道に入り、横浜に戻った。

The space of the Member

「いのちと人間をつなぐ架け橋に・・・ナラティヴ（物語）研究の可能性」

所員 人間環境学部　鈴木公基

「私と妻の出会いは運命的だった」「亡くなった母は今でも私のことを天から見守ってくれている・・・」。そのような思いを抱く人は少なくないはずです。しかし，これら個人的な思いはなかなか研究の対象にはされてきませんでした。なぜなら，それら個人的な思いは「客観性がない」「再現性がない」ものとして捉えられ，科学の根本的な原則に反するものと考えられてきたためと言えます。

しかし，私の専門とする心理学の分野では，最近，このような個人的な思いがクローズアップされてきています。その一つがナラティヴ（物語）と呼ばれるアプローチなのです。ナラティヴ・アプローチは何らかのテーマについて個人に出来る限り自由に語ってもらう研究手法です。なぜこのようなアプローチに焦点が当てられるようになってきたのかというと，私たち「普通の」人間の生活においては，出来事に対する客観的な理解より，それに対して個人がどのように意味づけをしているかという個人的な思いの方が重要な役割を果たすからです。

ある男性が，妻となった女性との出会いを「取るに足らないもの」として意味づけるのと「運命的」なものとして意味づけるのとでは，自ずとその後の気持ちや行動に違いが出るのは想像に難くないでしょう。客観的に見れば断片的でバラバラなものとして捉えられる出来事を，ストーリーという形にしてまとめていくことによって，自分や自分の人生を統一感のあるものにすることが出来るのです。

「いのちを考える」研究グループではこのナラティヴの手法を取り入れて研究を進めています。いのちというのは人間にとって極めて身近な問題であるのに，従来の研究の方法では，「死生観」や「生き甲斐」など，いのちが要素に分解してしまい，結局いのちの全体像をつかめないままになってしまっているように思われます。私たち「いのちを考える」研究グループでは「その人のいのちにまつわるストーリー」を知ることこそが，いのちと人間とを理解していくうえで重要なことではないかと考えたのです。

一人ひとりのストーリー（物語）には正しいも間違いもありません。ストーリーを物語ることそのものが人生では大切なことなのです。考えてみれば，現代人の多くは漠然とした不安に苛まれています。その不安は自分のストーリーがうまく描けていけないことに要因があるのかもしれません。「いのち」に関するナラティヴ的検討が，そのような現代人の不安を和らげ，健やかな人生をもたらす助けけるきっかけになればと思っています。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501
横浜市金沢区六浦東１－５０－１
電話：０４５－７８６－７８７３（研究所直通 月～金曜 10：00～16：00まで）
FAX：０４５－７８６－７８０６（研究所直通 24時間受付）

発行者：村椿真理
Director: Makoto Muratsubaki